

チェコヴィッチの回想録

チェスラヴ・チェコヴィッチは、一九一八年にグルジェフに出会い、コンスタンチノーブルからプリアーレに至るまで行動を共にし、二十八年間にわたって頻りにグルジェフと直接に関わった。チェコヴィッチは、グルジェフの教えを直接に耳にし、生のさまざまな局面におけるグルジェフの行動と対応を目撃する機会を持った。六十歳を超えてから彼が書いた手記のなかで、彼は、自分の人生はグルジェフに出会ったときに始まったと書いている。その晩年にチェコヴィッチは、不穏なヨーロッパ情勢のなかでこの記録が失われることを恐れ、フォメンテラ島の友人に原稿を託した。そしてその四十年後、この原稿は、この島の小さな白い家の屋根裏で発見されたのである。

今日幸運にもグルジェフの教えに出会った者は、彼を直接に知るといふ幸せを得ることができない。グルジェフを直接に知った者は、グルジェフの死後にグルジェフの教えに出会った者に、グルジェフという人物から受けた印象を伝えるべきであろうか。その答えは明白である。だが、どのように伝えたらよいのか？ 起こったことの客観的な記録というものは不可能である。だから私はただ、自分が受けた主観的な印象を伝えよう。

ゲオルギー・イヴァノヴィッチ [グルジェフ] の教えについて私から話を聞いた者たちは、この人物から私が受けた印象について知りたがった。彼らのうち何人かは、私が彼らに語ったことは記録されるべきであるといった。ミスター・グルジェフという人物の持っていたそれらの側面が忘れ去られることのないようにである。一部の者は、私の語ったことを書き留めた。この回想録は、そのようにして生まれたものである。

ミスター・グルジェフとの関わりをなかで私が目にした彼の行動と対応は、私に強烈な印象を与えた。それを知る者がほとんどいなくなった現在、それについて証言することは私の義務であろう。アレクサンダー・ザルツマンはすでに死んでいる。ドクター・シャーンヴァルもだ。トーマス・ド・ハートマンが私と同じ試練を受けたのか、彼の記憶が私の記憶と一致するのか、私には確信がない。彼はミスター・グルジェフの音楽の整理に忙しい。彼も手記を書くだろうか？ これをあてにすることはできない。

いったん何かの思い出について語り始めると、一連の記憶が奔流のように呼び起こされる。私はそうして記憶をたどり、何が起こったか、どのような事実があったかを報告しよう。口述と初回の校正は一九五二年と一九五三年に行われた。私がこの回想録に引用したグルジェフの言葉が正確なものであるかどうか、疑う者もいるだろう。それは当然の疑いである。だが、P・D・ウスペンスキーは『知られざる教えの断片』 [奇跡を求

めて]で「彼がわれわれに与えた答えがなにを指し示していたのか、私は長い歳月の後に理解した」と語っている。私の場合もまったく同じである。

この回想録は、私が体験した本当の出来事について、それからかなりの時間がたってから、私がミスター・グルジェフに寄せる真実の情をもって思い出したことの記録である。

* * *

一九二四年、ミスター・グルジェフはアメリカに行き、いくつかの都市でムーヴメンツのデモンストレーションと講演会を行った。私はこれに同行したグループの一員だった。どの都市でも、われわれはデモンストレーションを行い、ムーヴメンツの後、超心理学的現象の実演をしてみせた。観客は、トリック、半トリック、本物の超自然的現象を見分けるように言われた。この種のデモンストレーションを何回かした後、ミスター・グルジェフは講演会を開いた。

これから話すことがどの都市で起こったかは重要ではない。ミスター・グルジェフが講演する日、会場は人であふれかえっていた。聴衆は何か刺激的なことを期待していた。劇場で夜のショーが始まる前のような雰囲気だった。そして幕が上がり、聴衆が目にしたのは、何か特別なものを提供するふうでもなく、およそ三十人の生徒に囲まれて静かに足を組んで坐るミスター・グルジェフの姿だった。聴衆はショーの準備ができていないうちに幕が上がったかのような印象を受けたように見えた。

しかし、ミスター・グルジェフが、人間の**三つの脳**（思考／感情／肉体のセンター）、それらのセンターの間の不均衡と不調和によって人間の内面生活に生じる混乱、そして粗雑なものを精妙なものの支配下に置くことの必要性について話したすと（>参考）、聴衆の一部が苛立ちと不満を露わにした。何人かが立ち上がり、座っている人たちを乱暴に押し分けながら退場した。ミスター・グルジェフはそのまま話し続けた。さらに退場する者が増え、その喧騒のために、続けて話を聴きたいと思っている人たちはミスター・グルジェフの声を聞き取れないまでになったが、ミスター・グルジェフは忍耐強く話し続けた。さらに退場する者が増え、ゆっくりと会場全体に動揺が広まっていった。それでもミスター・グルジェフは、まるで聴衆全員が熱心に聴いているかのように豊かなゼスチャーとイントネーションを交えながら話を続けた。われわれの目に、講演会の失敗は確実に見えた。われわれは、完全に空っぽになった会場で話を続けるミスター・グルジェフの姿を想像して、耐え難い思いをした。しかし、ミスター・グルジェフは、豊かなイントネーションをもって話し続けた。ときどきミスター・グルジェフは、自分の知らない英単語について、われわれに尋ねた。やがて突然、ミスター・グルジェフは話をやめ、咳をし、あごを撫でると、よく透る声で、聴衆への非難を開始した。

「おまえたちは、生まれてはじめて、真剣な話を耳にしている。この挑戦を前に、おまえたちは自分らが空っぽの人間であることをあからさまにした。これは重大な話であり、だからおまえたちはそれを嫌がる。軽いコルクが水に弾き出されるように、おまえたちは弾き出される」

「去りたい者は去れ！ いますぐに去れ。だれもここを出られないよう扉に鍵をかける。その前に出て行け」

ミスター・グルジェフは、われわれのひとりに、扉のところに行き、出入りのできないように閉鎖するように言った。聴衆の大多数が立ち上がり、会場から出て行った。

ミスター・グルジェフは煙草を点け、静かに吸った。会場に沈黙が戻ると、彼は立ち上がり、次のように言った。

「他に出て行きたい者はいないか？ 君たちは皆ここに残るのか？」

残った人たちは、沈黙をもってこの問いかけに答えた。するとミスター・グルジェフは、完全に声のトーンを変え、とても快活な声で、みんなそばに来て坐るように言った。それまで椅子席や会場の隅にいた人たちはステージに昇り、ひとかたまりになって坐った。

ミスター・グルジェフは、このようにして選ばれた聴衆に対し、明瞭な声をもって、自分が話したいと思っていることは万人向けではないのだと宣言した。

「馬鹿者どもが去った今、われわれは深く話すことができる。問題の根底まで掘り下げるのだ」

聴衆は、非常な注意と関心をもってミスター・グルジェフの言葉に耳を傾けた。ミスター・グルジェフによる英語の発音の奇妙さをだれも気に留めなかった。彼らはミスター・グルジェフの言葉を飲み干しているかのようであった。ミスター・グルジェフは大量に話した。たまに話を中断し、他の教えとの矛盾に関する質問に答えた。

特に記憶に残っているのは、すでにムーヴメンツの公演を見て、ミスター・オラージュ（ミスター・グルジェフのアメリカへの招待者）のミーティングにも出席したことがある人物からの質問に対するミスター・グルジェフの答えである。彼は、自らの努力が、彼がそれまで揺るぎないものと信じてきた**彼自身の内面世界の完全な崩壊**を招くのではないかと予感していた。

このミスターは、彼の内面の動揺を物語る悲痛な声をもって、彼の抱いている恐怖について語った。それは、世界に対する彼の哲学的な見解や信念、そしてそれらが彼のなかに育んできた希望の基盤となっていたものが剥奪されるのではないかという恐怖であ

る。ミスター・グルジェフの誘いに応じて、彼は立ち上がり、体を震わせながら、およそ次のようなことを話した。

「ミスター・グルジェフ、あなたは私の内面世界をかき乱した。私の意見、私の見解は、揺れ動いている。おそらくそれらは長くは持ちこたえられないだろう。やがて私には、これまでの人生が私のなかに培ってきたものすべてが信じられなくなるだろう。だから私は恐れている。空っぽのまま留まるのが恐ろしい。あなたの教えのなかに、新しい基盤を作るための素材を私は果たして見つけられるのか、私には心配だ。大事なものを失った人間のように、自分の不運を呪い、苦しみに耐えるはめになるのではないかと予感している。かつて私は、自分の足が地面を踏みしめているのを感じていた。今、その地面は消えた。あなたはどんな権限をもって、私や他の人々に、われわれの心理的／精神的なバランスを乱すような、そんな仕打ちができるのか？」

さらに彼は、彼の内面世界が被った破壊的な影響の数々について述べ、ミスター・グルジェフを非難した。聴衆は静まり返り、だれもが彼の言うことを自分にあてはめ、ミスター・グルジェフの答えを待望した。ミスター・グルジェフは、このような非難をあらかじめ予想していたようであり、一瞬、彼の顔には満足げな表情が浮かんだ。

「あなたの恐怖、あなたの心配を、私はよく知っている。私の教えはあなたの意識に急速に浸透したが、あなたはまだ、人が現実にとどのような状況に置かれているかについての厳密な知識を欠いている。だれもが、その時が来るまで（多くの人間は死ぬまで）、**自分は人生で堅い地面の上を歩いていると信じている**。だが、自分にはバランスなどないこと、自分の心理的／精神的な安定はスピリチュアルな意味での盲目性を土台にしたものであること、**自分の知人にも自分自身にも何をする力もないこと**、すべてが無に消えていく流れに沿って自分たちは常に歩いていることを確信したならば、あなたはおそらく、今の道を歩き続けるなら自分はどこに行くのかを知りたいと思うかもしれない。私はそれがどのような道なのかを知っている。そしてあなたがその道を避け、苦しんだり歯ぎしりしないですむことを願っている」

「私が話すことを理解しだした人間が恐怖を予感する、そして本当に恐怖を感じるというのは、まさにそのとおりだ。しかし、この恐怖は、彼らが主体的に感じるものではなく、**彼らのなかに機械的に生まれてくるものだ**。だから、あなたの言っている恐怖は、**あなたの存在に関わる本当の恐怖ではない**」

「あなたが捨てなければならないすべてのことが、あなたが言うような恐怖をあなたに抱かせ、あなたにこれまでどおりの道を歩ませようとする。人のなかには大勢のつまらない『私』がいて、当人が現実を見始めた瞬間、それらは存亡の危機に直面する。だからそれらは当人のなかに恐怖を作り出し、私が話すようなことはすべて『悪魔に食べたい』という衝動を当人にもたらず。あなたは、不運への嘆きと苦しみを予感している

と言う。それは正しい。自分の状況について何も知らない者は幸せだ。自らにふさわしい進化を遂げた者も幸せだ。だが、いくつかの基本的な真実を知ったばかりの者、良心が目覚めたばかりの者は、幸せではありえない。目覚めたての良心というのは犯罪人の前に現れた警官のようなものだ……」

「粗末なベンチに座ったままでいるなら問題はない！ 客間の安楽椅子に座るのは、それよりはるかに快適だ。不幸せなのは、ベンチから立ち上がったはよいが、安楽椅子までたどり着いていない者だ。カラスというのはそれなりに美しい。クジャクはもっと美しく、はるかに賞賛に値する。尾に二本だけクジャクの羽を生やしたカラスは不幸せだ。そんなカラスは、他のカラスを苛立たせるから、仲間のカラスにいじめられる。このクジャクのなりかけは、クジャクの仲間にも入れない。本当のところを言うと、これはクジャクが意地悪をしているのではない。このクジャクのなりかけは、一部のクジャクから言われたことをすべて自分への悪意と解釈し、自分で群れを離れるのだ」

「いつの日か、百万人がこの苦しい状況を体験するだろう。だが、それで終りではない。百万人が失敗し、自分の責任において百万人が苦しむ。たった一人でも、＜自然＞に対する自らの義務を果たすことに失敗したすべての人間を待つこの悲しい運命を逃れることに成功したならば、それがこの百万の苦しみの埋め合わせをする」

ここで何人かの聴衆が、ミスター・グルジェフに抗議した。「それならばあなたはどんな権限をもって？」、「それならばどうしてあなたは？」、「あなたはどんな目的で？」。

ミスター・グルジェフはほほ笑み、慈愛に満ちた声で、次のように語った。

「一人が救われたならば、その一人は百人を救う。百人は千人を、千人は百万人を救う。この百万人の幸せは、百万の苦しみと百万の不幸せの埋め合わせをする。そして数億の人間が、彼らのなかに現れたこの新しい人類のプレゼンスから幸せを感じる。権限について言うならば、この権限は、客観的良心に基づくものだ。何の自覚もなしにどこにもたどり着かない道を歩む人間が体験する喜びや生理的な幸福感と、自分が破滅の方向に向かって動いていることを自覚するに至った人間の苦しみと不運とを天秤にかけるため、この二つを比較するなら、一方は何も自覚していないのに対し、もう一方は自分が自分にしたことを後悔し、それに苦しんでいる。だが、この二つを比べ、どちらを大切にしなければならぬかという問題は、客観的には存在しない。庭師は苗を植えるために、何の呵責も感じずに雑草を抜く！ これは花を咲かせる可能性を増やすために必要なことだ。苦しみの原因は、用意された状況を利用しないことにある」

ふたたび全員を沈黙が包んだ。しかし今度の沈黙は、肯定の沈黙、ミスター・グルジェフの使命に関する理解のあらわれとしての沈黙だった。だれもが時間の感覚を失った。次のような言葉でみんなに家に帰るように促したのは、ミスター・グルジェフだった。

「それではここで切り上げよう！ 明日はみんなまた働かなければならない。今のうちに帰って、少し休みなさい」

その晩、ミスター・グルジェフの言ったことから深い印象を受けた人々は、お互いの間の堅い結び付きを感じ、自分たちが受け取った真実への理解を深めるために、その後も共に集まりたいと願った。

このようにして、この都市では、ミスター・グルジェフの生徒たちの中心的な核が生まれた。